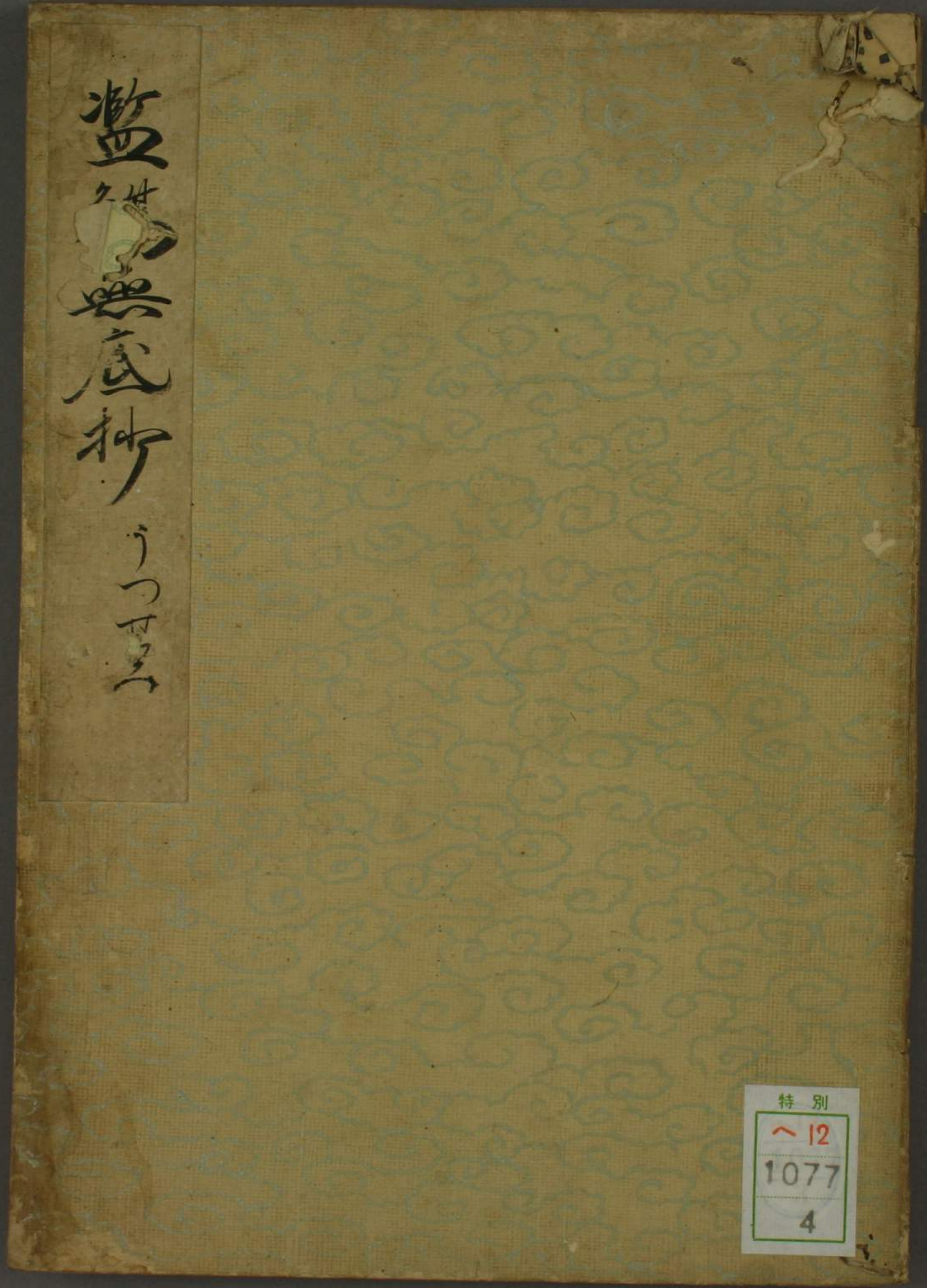


NODAK Color Control Patches

LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000



藍
久世
無底抄
うつろ

特別
~ 12
1077
4





利
1077
子4



空蟬

十六歳 中將

源氏自中川家歸給事

帯本卷此終の初よりをそはつて終り

ともむらり中川了りたりたりと取此事也

同六月比又伴小君宿中川家事

空蟬君与西西方打其事 西西方伊予守三女

源氏君垣間見給事

小君引伴源氏君令通空蟬君宿脱置為衣道去

源氏君人遠色西御方事

西御方号形瑞葵也

源氏取落衣出給事

老人君見源氏誤少補君事

源氏還二條院送奇出定蟬君有延奇事

定蟬 並一 以歌為卷名

う川きみ乃方とくそくろふれとよけ
人々此かろくくまのれ

卷並事

うはかの物流し才三並春日祭又才五
吹と此卷並 各名使 菊の裏 ちくくあり又く海
松乃物流しつふ物少と並一松ありとそふ
乃例也

義曰く彼松の並く大唐見此とて同也

かゝりて書之

凡は物語乃並此後一編より事をもとて
と横置あり此曰つと事をもとて所
とらゆり並しありこれと豈の並との
まゝやと此^皇蜂の巻是くされ^皇入も
二乃並しあきと昔^本の頃之並しとて
とあ^一一説よりやく日の文^は其^り
並一^本本^ふ二^夕夕^ふと^りと
玉蟹乃並を横置あひま^りつれり未

摘花園屋達生ハ一向横乃並たりつが
此物語の並も横とん^りつれり^淡松の並も
唐と日本との事と同時ありつるを
是し横之凡並乃中意ハ横の義より
也奥入し横横此^皇紙存し^中院事
書云 尚書の篇乃^て横^は並の義より此
彼席^を以^て舜^の典^を合^て於^て堯^の典^を益^を稷^を合^て於^て皋
陶^を謨^を盤^を度^を三^篇合^て為^す一^下康^王之^誥合^て於^て顧
命^も也^御是^ハ今^の並^乃なり^はつる^ひ多

る也並此隣近方并配是未皆ありしか
らふの訓あり 廣韻云并ハ合之又詩賦序
并序とありと世官家説ハ六序とあり
按ふると後し自余ハありひり序と
後く是も今此並のふし御相能歟
並ハ義ハ先横とりて本と云ふつかへ
松木此物終の〜〜但此物終〜終つて
豈の並く人責く人ハ一卷よりかく
事と未とつらて支卷よりなるやふ

花

〜〜又一卷乃中に横豈と〜〜あり
未摘花の事い〜〜あは若紫同時の事
と〜〜未とつらて後乃事とわ
まかぬと云蝉乃卷を豈此並なり
字紙りて存とあり

界

並ハ之乃極ありは事ハ豈の並く帯本
卷乃は〜〜凡並とすり事 西海花
鳥〜〜あり

紗

界ノ長同〜〜て並のり 史記

本記乃外より列傳と多て之より同一
より来れ

箋曰並に横豎乃汝清の事河海に
めてはる見あり源氏以前ノ物清ノ並に
皆横之同時とありて之を横といひ
者別乃年紀ありて豎と云並に并立
ハ横也

横豎事 天台本書玄義ノ才一云私謂
矣相之法横破凡史之曰執豎破三聖之

證得

箋曰横豎之說侮之者歟

私云 史記本紀世家列傳等之に准拠と
ありて桐壺乃卷三ノ一ノ早押本紀ハ
帝皇此次身年紀と云々云々
物たり世家ハ敬と世と云々云々
代と云々云々
宇治十帖ハ八文ノ事ナリ
多し此事ナリと云々云々
一人ノ乃一人ノ伝記ハ云々

そらりハ彼巻ありりおしとせんかといふ
くくりりしてくすくすをうかあり
しりあてくすくす

因去云帯木乃始ハ相愛乃末り
光君といふ若くといふ詞とうけて光
深氏若くといふくくくく書出
とりは巻と前乃巻ハ末紙くき
ゆく事ハ同類也

我々くく人りあくまされてとたうく

ねん

齊

秘

深氏君好色乃うくくく
深氏秘の好文と自様くく
うくせふまのやうくく深氏ハ
たうき人ハたうき也

箋曰深氏君ハまきよつまふ人か
とふたうきとの自様ハあつ小君
とらうくくせんとの見也

海とさ人

小君丈

いそらうし

深の心 箋 寂方うしそくさひい
こころふんかきりや

てさくらりあほうく

小君うそ蝉一君よしく無う丈

あふらうしうしひ

やうよははまふまふと志ぬてまらんも
いしよてまふたやうまうしうしひ

おがま丈

まいれやうあし

箋目小君紙前ものしくとあひ
うしとねりすもは内ととも 繕字ニナラフ

おろ子はいし行しく

小君ん中し

女と

うそ蝉丈

かみうしうしひ

羨みたるは普通の人もあり
き人としてこのことははるばるの
乃ち知る

やうしてつきぬく

羨 空蟬乃ちのすの原ははすし

紗 空蟬乃ちのすの原ははすし

志わすのし行い或はあつまひ

西方の人乃ちこの世かこもさるる志

さるる人志る人くううそあつ

く此程よりしてさるる人

身いまあつさるる人

く此程よりしてさるる人

らん事い眞女よそむけい

くらんい此程よりして

そつあつ

空蟬乃ちのすの原ははすし

乃ちあつは是又眞心乃ち

かぢ

花鳥云やうては

之蟬若此海氏ノあひさかひノあふ

知ラつレ此事ハ一ノ段ノ詞ヲよクいハす

かつテあリ極クうレはレわレるニ条後乃

条後よウ川ノひノ事トうタるハ

一ノ事トうタるハ

箋曰ハ河ト花鳥ノよクいハす中川ノ方

宿里の方遠ハ居所ヲ示ス其ノ意ヲ示ス

其香翰知ル申ラはレし乞河内方此

流ノ彫物流ノ具トうレるハ也ハ

〜

秘云かクてららめてんハハハハ

うレはレ此ノ終ノんト子細也ハ也ハ

くリりノ親身ハハつま形クてんんハ

らク程也

君ハ心ハはハあハハ

源乃之蟬とハハハ

こ君よいとほしうと

又小君と源のころのゆき

うれ

源 ウレタイヤ 懐哉 ウレタイヤ 望 日本

らあともあさるん

源のらあともあせぬ

多しうれと

将討 タビル 或 タビル 方便

かゝるころあそと

つらうとあつらうと

うまうとあつらうと

つまよう 惣状也

まのころあつらう

紀伊國へ下向也

美任國よおとし

女

とらハ昔に万葉に思共とあり

ふくふとら月とあり 美任國に風乃共

とありされと風とともおとこころ

私に 紀さる宿のさゆ也

夕御奥入これくらさしきくしをたふ

万に奥入夕やまふるさしきくしをたふ

さうせころのまふとらん

秘笈ホ川名をさる宿とと共向

うり也

わ車あて

笈 綱代車うり人今世乃板輿ゴレの

准授あて女房乃書物

わやもやまのむ

ひきこても將の字れん道遠後自

手がよわぬ此字と用か

あの子もおさか美伝

源氏れん小君のおさめ伝志う人

ふのそそりやうくおゆさう

えろとびまうけさ

源の小君れ志う人あやしとあや

さうけさう
因之抄
うり

あしうえおのせをいひまはす
おのりしりま

人んあうこ

幾外さまの方への向ふ東乃はま
産とありは春夜後の括骨を明
こころは紙つぎをいふ

よのわんあうこ

よの井人の書かしまる昔也それと
い子れあうあをれいあをいふ

我んかま

小君の内へ入り

こころは紙つぎをいふ

幾秘こころは紙つぎをいふ小君れ今

紙紙さうぬとあふにいんやんとき
ひし

かううういふ

小君れ今こころは紙つぎをいふ
てかまは紙つぎをいふ

うかそしつて

ひかりりあし乃西こそ

^花

作と外女うひ蟬のまゝ子と花人お
乃妻よかり新端乃萩とつひ人の
あゝの西こそつひつきて徒抄る
くよつり

^井

後人乃家ゆ此方よあされたりや
^母ひ家北西うあつりてしああや
因去を蟬乃わゝあゝ音りりあゝ家

ろく

箋曰ひ家中川乃宿りり西あされ
るれと

同字と作と外歌はひ中川乃宿りり
あゝあされり

松と只今深乃思ひりり始宿々中
川とあゝ紀作と因と下りあゝりて
乃とやゝたゝりあゝと又とゝあれ
方遠の時西むりてあゝりてはひ

わさるるにあらはれし新の森の中
川乃宿の西面はゆるしとて新法氏の
入るとりくは物終せしとてはる
とわくみの森れはゆるしとて合せしと
まこれよりりておの君とつるを蜂
をりしより東の面はゆるしとて
あまの君とつるを蜂とつる
ゆるし

碁うせはゆるし

^可博物志 堯造圍碁 音期字亦作碁 此同云五 一云

舜造

晋中興書云 圍碁堯舜以教愚子也

音の興言の國表の書宗の結意の

音の興言の國表の書宗の結意の

國去々々に其此事とつたおとハ深
心志のりまらせえ後ちんこの
縁りおりりくとりあせり又其を
と精乃入物あましく力とととと
るそのやうの取とととととと
と此をく入り空蟬ハ其りりり
アアアアアアアアアアアア
乃其ハ枯禱のありあきくくく
くくくくくくくくくく

さそむらひのうらん

源乃基のうらんとりてきててな

あひのゆえ

おれ入行のうら

小君れうの責めりて入ぬ

りかろし也

あしはよ見とる

弊

きつとる方よりとるのておん

るるんゆえ 秘箋回

うらうけ

本丁のうらうけ

かろゆえ

火らう

火乃進来又ハ切灯臺事ハ切灯

キリトウ

臺とておとるうらうけ

うら

我んうら

空蟬

お貴あやめとくく

何

こき後、紅乃文二死くよに、さそらう
ちま、いまひりも白死うす物乃
ひく、さねは二あわれこらら青や
ありは巻あも、のうす夜ヨロヒのこらさ
乃の、かろく、貴人書に志ありと
り、然たりや乃け、らよ、せくみて
ささう、み、はとあか、く用さ、あり
貴く、と、い、えん、と、せ、た、の、た、に、く、

あ、ん、と、ね、が、り、と、

花

女席乃装束五月又日、りを、む、く、人、さ
移く、さ、か、ひ、く、く、あ、り、と、の、移、り、と、
ね、を、ら、物、は、は、時、は、さ、ら、に、む、く、人、さ、
こ、ま、と、あ、れ、う、ら、さ、れ、事、く、こ、ま、と、
そ、め、く、う、く、く、く、く、海、り、紅、乃、文、二、死、く、
あ、ら、さ、れ、う、り、い、く、く、く、く、く、

舞

花鳥、月、さ、ら、り

秘

地乃鏡、ゆ、く、く、く、く、く、

箋曰花説よりひ移りてさうひの物の
事也

何おのあひん人よまて

ひ人よまて人よまてひまて
一得傳書 又説あり但切けよ不分明

ハ何あつとつる也

ひ人よまて人のよまてひまて

説あまてとと只切けをり人よまて
箋曰只灯下 彷彿ハハハ衣服 不見

蘇美西説也

なるもわさつとつる

笺曰 穴蟬の羽ささあまて 箋曰

手つ責屋せくあて

是しつ川蟬乃秘也

基とつる手あつとつる

これ程のひさくもて用意あつ

つるあつとつる 箋曰

いまひつる

^秘 水く此花のむのいれ方りりる花が
り東じさたりいりりのうらむかく
こくはさきぬい

あさあむあこら素

^秘 二藍く 少くともい同事ん

あくと花あつた二文あてとむけと云
幾回く 年にいりて浅原ありとい
并回く

私曰あ升乃浅原ハ若年ハ赤花
おりく喜花とくやハ赤花ハ喜花
おりく赤花とくやハ赤花ハ喜花
後ハ赤花の文ももくわね花
花回あつたあき

かいつーあよふあいて

朝くの花乃衣裳もく花との花
ろくは喜りいん入る花く
あき

くれか升乃ういりて

梅見

目見く

しりりし

下場く

劫文

紫式部、假名宛少と

は約あり（ハシミ） 流義物終少とは行やさる

ことありいつきも髪乃事く

並 さりりさるさまうく人の字湯 紙又云

霜乃わり人回ら

さりりさるさまうく 箋 さりり人しりり

あつさまうく は 介河シ上ナリ

私云さりり人ハ下場くさりりさるさ

しりり人ハさりりさるさまうく 霜乃わり人

あまうり 同 一 さりりしりり人の髪乃ハ

人の髪乃ハさりりしりり

梅らけさるさまうく

秘 あまうりさるさまうく

箋同云ハ梅ハさるさるさるさるさる

しりりさるさ

何回 回回 漢書 諾

源のふよまきこしとおくつをてう
けふそてんろく之語の字ふんまう
まは 秘 伴子介乃々まははる結言
とせとくんよの源れん結句
回けあもこれとてふん

くらそ程志つたなるを

秘 人乃性紙をくくつ細
秘 人ハんさ飯よりハ用意しつたが七

は人ハがこつりかしてつたもあつて
うーきりけをくくつ素人人の
性のとて

かとかたはまのま

箋回と 弟子此評し

秘 一切とかたはまのま
くつ素人

回と云一とあをこつたんれ一とるれ
りハあつたて

私之物よかとはありのいよとれぬよと
いふ花あり

けらさすよとあり

^何 田基 結ケチ

又 瀬ケチ

けらとみてよしとありありの瀬河

箋曰 願はた目とさすの結ケチ

の 願ケチ 去 願ケチ

の げケチ

の 疾ケチ の 疾ケチ

の げケチ

早速ハマシ いそりく物さうケチ

おくろ人ケチ

は時 源氏君のいす人ハ東ケチ

戸より西さすケチ

母屋乃 柱ケチ

君たりケチ

そ家ケチ

ゆあケチ

しらぬれと西屋に柱くれよわさる
ハ細くじきされかうりてりりる
一ハ西の奥乃るまきしじふら
ととりてかく此人のつる西の
西方の奥よわ侍道とあふよる
ハ一ハ此の人じきさるなる也
奥乃るにじき人と一様如何
又者了見
おく乃人ハつる蟬ハ庭の奥乃る也

死色の義不審あり

義ノ義同

因去るけきハけ一乃るあれと
居やう乃奥此やうよるわさる
いてわさるゆい

ちあしあ

ちの地又持しりあ

義 持てたれ

私一変よ乃る義ハ 秘 義同

こゝろ

却也

一却二却ノ却ノ字はとひのやうにと

しる

箋曰は義叶うやせああひまの対を
一つ子のつきんさあは他もあおとのや
して石炭くひろくふ事あるは
子也

一 いてはるひはまけよきり

秘

斬る此蘇乃句

ソハ終とおこは

箋斬る此蘇乃すけくひま

勝とる也

しる

箋曰はるひはまけよきり

入て刀んとも

とひとてとてとてとてとてとてとて

十才世四十ノ請君屈指教 白氏

いづれ山をこし

奥入

いづれ湯乃山をこし

いづれ山をこし

河

いづれ山をこし

いづれ山をこし

いづれ山をこし

温泉記曰く 暑し 豫列あり

湯北湖中あり 湯乃山あり

乃こらせむ 七十七段也

風土記

けむ乃敷 五百二十九段也

素舞説

六花集 古奇とて 出せり いま乃湯

の山をこし 敷をた八右を九中を

十六とて廿三ありと云り 雜藝

奇人かき 乃山をこし

素舞の説 乃敷をこし

九と云り 是ら此説を

尋せし 又いづれ乃山をこし

ありあくる記述の物語

或説伴五圓にこの伝よむる海軍
出ら温泉ありを湯に柳をま
しむるしぬ人し志をくむゆ
入事十月に神あり神人
うさありあり奇云のよるゆ
いつけえを志すぬた九つ右を八
申ハ十六やきりさくくり
りして酒家山下きぬくはり

とく

箋曰 何記 皆それとのと物くめ

蘇目モクサシ筆ノ根折りの人よあはり也
而しあもくさん分明さうりむを
伴よ丸湯のゆきさにいひしき
そ人ともよるすと雑流方よる
とこれハかき人も志す人き也

とくし志す人き也

箋曰しりけのさばるる蟬よまらり

さ波よそ只りそ形
人乃教肝心ノ詞
わすれしものこわりつたろふゆとあ
らさあふんたそと

ふとくへかく

蝉の疥齊 秘田一 笈田一

めとくはつをうれし

空蟬ハ極くれよおひひき
ふさ波あふにんぬくと何ねと

源乃はとつをいゆへり自然そ
目れとつをいゆへり

めすくへとられなり

目乃上腫ら極之次詞よ秘ひきそ
とあり

一鏡言晴てれむい多き赤んねと
はまあやまはり

腫齊らやうし

一ほひいぬりにとれく

くむて然

^秘晴うさひさひめるるく又ハ目のよれ
あつさ然いさひきて然し

箋曰支義ハ内目ハさるるかハと用

ハ

もかたしと祢ひきて

^弄鼻あもくうらぬや ^秘同し

箋曰漢高祖リウシユン隆準ト鼻ハナタヤナリト

ホメタリ 經ニモ 鼻ノ高カク脩シユとヤ直トイリ

鼻タヤナラヌハほめぬ可らるゝと熱別

うつきみはうらもくきぬ人こ

同去祢ひきハん子のひさ々神ん

祢ひきハ寝外フシのハ也

いひたれは

^弄空蟬ハうらぬ可うらぬれと遠か

よのりそあハにくくもとん是又

人あなハハハ ^秘同し

りそはけて

義品うさめに切らなはさうに
つはしつる前之只人を用意
さゆしなうり

去れゆきわらんりい

西乃西方の事ころらんままされ

あやうし

くしらを蝉しりいゆされり

見花

義曰まきわらんり地をまわらん

まきとあま

あはりし

斬くのみ森事也

秘因

うわらまは

あつたれうし 後成り女説り

まらり

義義何にむきし せうをるし

じりり

あらしり

いと打し責事と源の御方より
あり

こ君がくはらりしれ

^秘小君がむらりしれこのとれはむらの
さき

と殿の戸くらり

義曰寂前よりそのまうはあし併立

ゆふりと小君よせうと ^秘同く

いとくをうと

^秘小君の心

義曰聊レ余乃レ西レ府レ前レと小君の心よ

思きあり

まゝいり人ゆりて

^秘あいの西レ方レ紙レふ 小君の心

義いひた責事ありておく

さうたかり

さてあひりや

源の御方

かきしり

小君初もかきしりと句をさうりて

らんあし

あかしよらり結かこ

朝こめの藤れらうらうらふとせ

しとあひうらひてあに

美日源の心小君のやう御へたれ

定てさる御も納得るや推し

まゐり

物乃心いえけり

小君のそれたれととるやうりあは

分別もあまをさしきうらり事とて

あしとらひまあてあまを源の心

まのしそつを初

わら君いほくに

こころの初

小君の官女の心

安き若君とくじ但君乃れ

こゝろみこし

小君乃出入此而

志のまじりぬたり

笑曰若寝定りうら

志のまじりぬたり

まことの始とつけて源乃初

こゝろ子といひうとの心

おれ小君の尸極少く源乃を輝

よつひあはせらるゝとわは

されともや輝乃の普通ありとも

のつひ合とも人々極とわさく兵川入

らんと小君とくくじくわと又出

らるる也

けい子と小君ととては

也

笑曰汝別あり

まのちろいりとも

新しの扉もこゝろとにあらうのそ

うを源ノ小君ノ一の跡也

いそつさるゆらん

小君ノ初也つそつさるゆらん一のそく

うのゆらんといふ也

ゆらん

源の初さるゆらんよあらん也むこ小

君一のゆらん也

されよ也

源のゆらん也

義曰くくひまをせし物候とあり

くちのまをせされともらんさるゆらん

のゆらんこ用捨也

こがさのゆらん也

今交 日本紀ノ由

ゆらんけりゆらん此見記也とむいせし

紐名乃とむゆらん又いふいともあり

あはつりしとき方ハ妻名ノりり也

あはつりしゆらんにゆらんハ紐ゆらん風

吹とくせ

何志

風かけらんまのてたうし

あまんと君いひそくゆ

菱日涼くわくふれとせて下

ふ海風乃のさうんあうく

角とひあけて

界

屏凡くわ水網い

秘回

菱日屏凡くうみせそあう

ふ海風乃のさうんあう

とくあらしはらう

くはけりひとあらしつう

うあさう入

東のひそくに袖らんこの音

てわく

とくあらしはらう

菱日小君乃袖入をう

わく

火あうきう

義國去あゝ申みひのりけうらと只今
つらとく火あゝくせん方々うら
小君れとてあゆみきうた

屋とついでとてまのりか

^秘やとつら初い志のりよあひやうなり
ふか良し奥の初りやとつら
責出てとありい春りこの初か
り

いっあやとつらま

^秘おのつたかくこの初源氏れゆら
いろの初りか責

初とあけて

義國去んハ川あまてとされとも
けの字と濁てしむを信よ手
清てしむ

やとつ入活と

経よあひのやうかろと前同
義曰源乃用とほろあひうらと

秋涼を物志のつゞれしものさうき
振たはれん

庭のつづれ

優昇のなほりしきさ後人かかす

—— 秘回し

美同源の用さう優の物さうつづれ
つづりてされとさうつづりかうつづり
面白初し

女ささく

秘
元輝のつづれ源のつづれつづれ

くつづれつづれつづれ又つづり

忘れつづれ

つづれつづれつづれ

君さあ源のつづれつづれつづれ

つづれつづれつづれ

つづれつづれつづれつづれ

つづれつづれつづれつづれ

つづれつづれつづれ

葉はひ舟の心も付れ

謙徳全集云

世奇

ふらふらあひひらひかろりあよくくされて

喜はこのめとていとありまふ

ひ舟始渡るも同れは好くは女勝也

秋葉は舟ッ川

箋皮深乃事成うすく忘くくも物も

春あゝあこのめと

お舟ノ詞ととりてッり喜かゝあ

とよみうさふ面白

暮ららけり君

朝くの萩也

箋因小君のこも

東うら紙穴蟬の不意よそそい人

ととめて物さそろりかた

いまあゝゝゝ

箋因いつもはあは事あれいとめうくさ

まう紀人の何んかく

萩く箋皮乞ふそそ蟬ああや

く思ひて用んゝゝゝゝあゝゝゝ

これめと
いとあはれ
めろりとも
とてあはれ

前々心ゆくかきこりし袖もきり
よかといはれども木

くむけたらひあ

秘 源此忠ひ入まふさま也

秘 幾回し

ふかとりしむらに

秘 空蝉し

あさまうくおほくて

空蝉の心

空蝉
もくろりそそもり

空蝉の懐ノ介へといひかかれそりた

そくひりあしむら紙

秘 あまきすそてい空蝉のむらりあしむら

あまきすそてい空蝉のむらりあしむら

ぬあし

ゆり此志りにあまりりりそ

あまりりりりりりりり

秘 空蝉のりも物くくまらるる

あまりりりりりりりりりり

さふく 箋回し

いふれ交さぬ

萩も花よしく雨ころも長

とあり

^秋空蝉よかろりさる

御しく見あかりしは

^秋欠蝉よりあつさふく心

先給也 箋回し

んやまうきれ

源の心

人ぬくたなりて

^秋人さるれやうに志ゆし給くわ

あやしと

物らの萩の不審さのへま

かい乃ん紙

^秋本意の人を空蝉とさうして

これ程我身とうとみそわふん

あつくと人ぬくのやう

蟬と鳥をいふとあはれはうらりてとこり
まゝうら人素と也

かあおうーうつふ

箋 秘同

^秘 暮うらりー時久路ーと南たーは

それとあくーはあがと也

まああはれとあさ

^秘 子あ地也 箋同

箋同くむゆーうけいふあはれと也

あはれくめさゆんて

萩たけり

いとおー青うらとあ

萩乃んあはれと也

あはれとあひ南とんは

^秘 あはれハ物ーは也

まゝと世はとあはれとあはれ

かゝうふ也

箋曰萩乃と後を中とくわく

うまひとあつちつとあつちつを
いひさげけのらこ

まふん人

箋曰 括弧あてしやてんとき人
我方の人此事あつちつあつちつ
一青こ 秘同く 箋同分別のゆ
さつち人のあつちつあつちつ
をそのあつちつあつちつあつちつ
さつち人あつちつあつちつ

さつちにあつちつあつちつあつちつ
あつちつあつちつあつちつあつちつ
あつちつあつちつあつちつあつちつ
あつちつあつちつあつちつあつちつ
あつちつあつちつあつちつあつちつ

あつちつあつちつあつちつ

あつちつあつちつあつちつあつちつ

あつちつあつちつあつちつ

あつちつあつちつあつちつあつちつ

あつちつあつちつあつちつ

^秘とにいとくおと忘れぬあは

義心は責をよ深くあひ
まよふ

こゝろ人志
^秘蘇ん

人志のこゝろ事なりと

^秘源乃水くみ義よの源あ初と

義源の義よつひ志もせ初と

是の初くの蘇乃新よ蘇りてし

むめりの源あ初と

源あ初と

^秘源れ我力とわつ力もせせぬと

義曰まの責よは心のまもるぬ在りか

福てくくの源と

又源人責んてと

^秘杉や兄をとも親りをゆらう

やまをまて

忘きて向ら流るるか

三つともうらむとてつらむ

る紙く

みゆき乃巻よるくくくくくくくく
くくくありち紙人乃紙くくく
もくくくく紙日紙くくく
まきくくくくくくくくくく
是もきくくくくくくく

る紙くくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

つね乃くくくく

白くくくくの紙 真く

箋目三義若くくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくく

人乃紙のくくくく

新く乃義の紙

くくくくく

箋目義のくくくくの奥と紙く

オソクシキ
まゝの詞は改めてよく分

すん

かゝての人

秋
源乃詞

いちいふた人

秋
小君

私
音
夏上

き

源の詞は改めてよく分

新よとく

おき

興
凡集之
女乃

てん

あ

海

ま

秋
空
蟬乃

を

私
之
あ

のひんくわん輝君とて

くろめさ

^秘ふらふらそつねらるる御 義目

心しきりあつて秘さるるわがて

さうけらる

むさふあさらあしあて

幾日若志れ秘えつとて此物れん

おとら

こころをさるる頼

まろりく

^秘小君のあふらるる 活版くさる

て出ある

義目小君乃失んまら

ゆららるる

小君れまきうとてあまらるる

報中しふこはあ

^秘さうらりて小君瓜はうとて

私云 群の義不審

あしはらて

^秘さうしらうてん

箋同く切者ミヤシヤかりしとてん

とさぬく

卯さきし来てむらうらふ事

いとみくして

^秘小君うん 箋同く

あしは

^秘くうくくとりしと昔あり箋同く

花同く

若紙とて

小君乃ほくとる人として

かきしとてあり

人乃りけし

源氏老らうらむれみつきあり

又ねらうらひあり

源乃りけし紙中とてあり

^秘い女れ多とて又氏子のあり

つらと白鳥白鳥之 **死**ふが少輔乃
あつらあり中シモトのうりり之 幾回

侍者 良文集 御許 新集

遊仙窟云 從渠 渠 ハレテ 汝 ハレテ

^死おひ人の源氏君をあまの多うと同
てらり又ひりりらにが捕ま
御房あそあそせりとののり
まいよんあやまりらるるけらま
女房あれし源氏とそまと思へら

小君う少おの君とときよつまあ
くそとあひらきわらふ
あまの今立あひら
おん小君の後にが捕のあま
あけよひらく成れんとも
し

¹⁶ 笈大鏡よりひたれをもの物あ
あまをわらひ程のうらあそ
ふら **和泉式部**の素名と西條 シモト

九とそつひきり

多けらら子とよ

あれ中々いさむらら此初たけ

比い母をうけとよ

きりけらる人あ

箋秘甲

とけたりきとて帝に人よ

人へ 臣が補のたりの事

は初事子化れ

こまははる秘

列 初列のらとあゆむつ

たり

秘 氏部はむらとつ事そあり

ら

いむらとよ

秘 氏部のかりとのせいのたに共今

り小君あやと人きと也常

老人あし事也

いさしり

小君乃出ふなりむ人し出給なり

まひしきれと

箋小君建出なりていさしり

かくれもらひぬくまて

^花源氏君也 秘源の立かれ給也

あのおりし

いねりしむむ人

^秘源氏部乃木りしむいさしり

子

おしこしん

^花む人の源氏部乃木君と云そり

よりて物さりまら也

えむあましりく

塔也しりく義也

いさしり

^花おしこのむ事しりくさりてあれん

いさしりしりていさしりいあも

秘¹同し

いぬさこん

今又やうてまこいふらん

から

秘¹源のひすきよむきえくらりてい

きくくらひ苦勞くらりて

程くらかありきい

秘¹菓子地

おひーくらりぬ

秘¹くうへ責事 箋作を批判

小君は車れちりぬ

車¹は後の方とくせせぬふくよきん

あくらもれ端くらにのふて終りき

志ちりりくらりの終り端のこ

いかりのしき

ありさばれさむひて

小君よあしひれさぬと源のこ

まき

おされるるを多りと

箋小君の事とれまふ

つらあり給て

箋あはるしひらひの御しふらふ

秋同し

か乃人れん

箋や蟬し

いし打しつて物とききあふん

小君の思ふふし 箋同し

源の御ら中紙いし御しく小君の
あふん

いしあふんあふん給つらわれし男もうく
あふん

源親し 箋同し

私言いしあふんといふらり

ふはるあふんといふひんしの給らふ

あふんいしあふん源の御らふ

因書いしあふんといふらり

乃とくく思ひくそねとつかすを瓜
小君の心申しとらるる義ありいとふ
るあくもさるるのきみおのちと源
乃はくくそらねくく小君とよじら
ましくおぼすまゝと義と義とて
乃もくくそらとては義あつ只あは
義然——

いと此介よととりまきか

源の我身いよの介よととりまきか

しとて

をたはらこうらるる紙はすうた

^秘うすりの字む面白

何この紙うらるる書れと

^秘空蟬の字はきくか小君と

今をあられとらるるのまゝと

はききゆりて

うのきみあつと義あつと始終

え思ひくそらとて小君此書紙

蝉の鳴く声

さきさきと鳴く声

小君の

きこえぬ声

わさよの又よのあはれさきさき

あはれと共今所よりさきさき

まあはれさき

うの蝉乃方成りてきこえぬ声

相人々此たあはれさき

空蝉ハ 蟪ヒメケ 文選 蝉ヒメケ 蛸ヒメケ

はめさきさき人々さきさき

さきさきさきさきさきさき

のさきさきさきさき

さきさきさきさきさき

さきさきさきさき

蝉乃もわけさきさき

人々さきさきさき

蝉の鳴く声 百葉集 第一中 大見三山 秋

何人書

男ちく形くして

男よわれ別はんて

こ君くこり

うけせむれく人形くあ

あさまうしるきくにとくくまはる

く

秘 ちやう乃事ハ十の物ハゆきくいとく

本とあし海とくくりて小君紙

んおさ形くくきくしりくおん

く美く色を蝉のつさめくく

しあ

ははつさく同中くくやうくくあ

あさまうしるきくくくく海く

りてくくハ蝶く此書くくく

らばくくハ形くこの森くあひあ

えれくうけせむくこの山くく

あくく森く此山くくく人此知く

ひまふとくしるはねくくあふれ
はんれあらん事とくはさうし
ろをねとくあれ

ひまふに

小君あやうれ事と一旦は源れれ
しくねあすとも却るんか
「ま事うとく小君とくはね
とらしひあし

ひさうみさにくるく

花

源氏君はは事ゆよくくねり
姉君と又とくしめあよ小君た
りくくしうあふし 秘用

あまうふらりて

うけあれらとくあふくく
このく心よあくはとあひやう
かひさなとくあつ真女

つせおのりもれ志あむたやあ
きうあ

ら
あつゝや作さかのりまはわ
あれさりとんやん
まじり山のせれのりまのりま
あれさりとんやん
これ、後撰、伴尹朝臣女ノりまに
まじりまきてとりよはつゝ
とあり
あつゝや作さかのりまはわ
あつゝ

思ひなされり
あつゝ
あつゝ

又一人とて
あつゝ
あつゝ
あつゝ

小君此よりありあつゝ

秘

新く此萩のふとび小君して源を
とらまはさるるに
かよきとたはれと思ふ

あさきしと思ふ

萩乃の中

されう家なり

秘

弟子の地

は連んばるるに源乃西喜し
と結るるに

つぎたはれん

秘

空の蟬

あさきしあもあわ

源乃の中はつぎたはれん

あわ

河

あさきしあもあわ

あさきしあもあわ

あさきしあもあわ

あさきしあもあわ

物あり様と

奥入

何

秘

どりくんと物ありあやせ中とあり

しあし乃親身とてん

中解のん中始終いふあり我

かすすささささささささささ

あつて奥節乃のありて

ふされぬ方のありて

これあやさうみれ

あは源のうつ蜂のあはて

あつてさうさうさうさうさ

かすのり

さうさうさうさうさ

心分定輝

うけせみ乃ありてく露れこくれて

志れひくくまわさし袖のれ

秘

あつてい奇作扱集ノ奇之何海

くうくくまわされたり

い奇作扱集ありてくこれと

古今あつてい奇作扱物ありてり

てしむる所より素て万葉奇
あまこふりあさうふけえんむら
奇あこ又うのふよ露うをくれば
あまれ川乃言の下句と赤人言
これゆふうくふるひひと星あ
わら舟乃ういの志行くれば言一回
隠蓑物終云ぬき物のりあふ人のあ
まここはまこくえれぬらん較むる力
はあまこも古合乃花くまみ乃言り
み又子乃弁はくくく次又ひ物終のこ
あこもまふくあくと一乃の弁と
上句終言女御ノ集よありくく乃
くく集れ例あまをくくくく
箋曰ひ弁 全篇 伊勢集ありの
河海は物くくく見ん紙くくく
箋ノ後 乞ハ空蟬乃物言くくく
伊勢集ノ古弁紙くくくは時お無
くくく御 母くくく紙乃くくく

書をよみたりありて深きあり
作被ハ本くられて病ありや
とそありていふる海たりはび
つとみありありを我の心
くられて逢をいふを本くれば
定てそ逢あり人—まの神
とゆゑまを

九^ノ禅抄 前書言 仔細物流り

みられくろみふりたりはゆ
せり家奇れ類たりあり

Handwritten text, possibly a title or page number, written vertically in the center of the page.

Handwritten text, possibly a date or location, written vertically on the right side of the page.

Handwritten text, possibly a signature or name, written at the bottom right of the page.

